

NORM-CORE THE NEW ATTITUDE

ふつうをさがして

2014年にネットから広がり、ファッション業界を席卷している「ノームコア」。大衆のなかに埋もれるような、ありきたりの日常着による「ふつう」の装いについて、エッセイストで服飾史家の中野香織さんが考える。

文・中野香織

2014年のファッション系ミーム、すなわち、もっとも多くインターネット上で拡散され語られたテーマないし概念は、ノームコア (Norm-core) でした。ノーマルとハードコアを組み合わせた造語で、私はこれを「筋金入りのふつう」と訳しました。

郊外のショッピングモールに行けば、大衆のなかに完全に溶け込んでしまう日常着。ブランドが一切表に出てこない、ファッションステイトメントのかけらもない普通の服。「ブランドレス」な装い、「トレンドと無縁なこと」をカッコいいと見る心の態度の表明、そんな矛盾もはらんだふつう礼賛のトレンド、それがノームコアです。

ちょうど1年前の2月ごろに話題に上り始めたのですが、ランウェイではルイ・ヴィトンやグッチまでもが実用的な日常着に近い服を提案し、7月のシャネルのコレクションではフロントロウの観客がほぼ一斉にスニーカーを履いてきました。これまでふつうの服を扱っていた「Gap」も、あえて「ドレスノーマル」キャンペーンを実施し、デヴィッド・フィンチャー監督が「ふつう」の服を着たアンジェリカ・

ヒューストンやエリザベス・モスを、ふつうじゃないくらいカッコよく撮りました。日本でも、自分の生活にふさわしいベーシックな日常着を最低限もてばいいと説くジェニファー・L・スコットの「フランス人は10着しか服を持たない」という本が異様な売れ行きを見せましたが、この現象もまた、世界の都市部を覆うノームコア気分の表れとみえています。

地球上の大半の人はなんの気負いもなく、昔も今もノームコア風な装いなのですが、このトレンドのポイントは、ファッション業界の人々が、意志的に「ふつう」を選択しているということにあります。一昨年まで個性的でエッジが効いたファッションで注目を浴びていたファッションイスタが、集団に埋もれる「ふつう」を、今の気分になう理想的な装いとして選び取っているということがキモです。みすばらしいのはNGで、あくまでも意志と風通しのよさが感じられる超ふつう、それがノームコアなんです。

その意味でも、スタイルアイコンは、故スティーブ・ジョブズ。常に同



DRESS NORMAL

Gap ドレスノーマルキャンペーン

ノーマルを通して自分らしさを表現するGapのキャンペーン。

「普通」を着るの意味を問うことで、自分独自のスタイルを大切に、自分が心地よくられるために何を着ればいいのかを問いつけている。

UIDE



STYLE ICON

ノームコアのスタイルアイコン

Steve Jobs スティーブ・ジョブズ

いつどんな時でもイッセイ・ミヤケの黒のタートルネックニットとリーバイスのジーンズにニューバランス。その一貫したスタイルがノームコアのスタイルアイコンになっている。

Getty Images

じ黒いセーター、ジーンズ、スニーカーという日常着スタイルなのだけれど、実は数百着も同じセーターをイッセイ・ミヤケに作らせていたという、変態すれすれの強い意志が貫かれたハードコアな「ふつう」実践者でした。

ではいったいなぜ、これがトレンドとなり、かくも話題を呼んでいるのでしょうか？

まずは、ノームコアという造語じたいが巧みで、耳にも心地よいこと。近年、「トレンド」不在だったファッションの世界に、久々に「語れるネタ」としてノームコアが登場したという感があります。

次に、ファッション疲れ。ファッションで個性を主張しようなどというプロバガンダが行き渡るあまり、見渡せば、みんなおしゃれて小ざれいになった。SNSには着飾った自撮り写真があふれるけれど、なんだか同じに見えるし、見え隠れする自意識も気持ち悪い。みんながみんなファッションに気を遣うあまり、かえって没個性になってしまうという皮膚にあふれた砂漠のような虚しいファッションシーンに疲れ果てた人が、ファッションに無頓着のように見えるノームコアに心地よさを覚

えるのは無理からぬ話です。不毛なゲームなどそもそもあずかり知らぬという態度の表明のほうが、クールですし。

さらに、最近のプレイヤーたる人がIT業界に増えており、ジョブズにせよ、ザッカーバーグにせよ、影響力をもつ富裕層がほとんどノームコアであることも無視できません。ファッションのゲームとはまったく超越したところで自由に活躍する彼らに対する憧れないし羨望も、ひょっとしたら潜んでいるかもしれません。

第4点として、時代背景もあるでしょう。高級時計や宝飾品を惜しげもなく買える富裕層がいる一方で、激安のファストファッションですら贅沢すぎて買えないという貧困層も増え続ける社会。トマ・ピケティが『21世紀の資本』のなかで、中間層が消滅に向かう超格差社会の到来を警告していますが、「究極のふつう」探しブームは、異常な二極化がすすむ社会のなかで、ふつうに人間らしく生きるための基準（ノーム＝ものさし）を探せという問いを、私たちに突きつけているのかもしれない。

中野香織

エッセイスト／服飾史家／
明治大学国際日本学部特任教授

過去2000年のファッション史から最新モードまで、幅広い視野から研究・執筆・レクチャーをおこなっている。著書に『モードとエロスと資本』（集英社新書）、『ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち』（新潮選書）ほか多数。
<http://nakanokaori.cocolog-nifty.com>

